

## 訳者あとがき (v1.3)

本書は Jane Jacobs, *Death and Life of Great American Cities* (Vintage, 1961) の全訳である。既存の邦訳は原著の前半しか訳しておらず、また翻訳自体も問題が多かった。本書は原著刊行から 50 年たってやっと刊行される、初の完訳である。また、1992 年に刊行された新装版への序文も収録した。著者名の表記は、現在の慣行にあわせた。

### 1. 著者について

著者ジェイン・ジェイコブズは……本書の著者、というのがいちばんの紹介になるだろう。彼女は学者ではない。通俗的な意味でのセレブでもないし、公職や組織の長の経験もない。彼女は本当に、そこらの一介のおばさんだ。だがそのおばさんは都市の活力の源の一端を見極め、それを本書でありとあらゆる側面から分析すると同時に、自分の観察をもとに市民たちの運動を組織し、ニューヨークのダウントウンの大規模な再開発を見事に阻止した。一介の素人でありながら、彼女は観察と理論化、そしてその実践を見事に体現してみせた。それが彼女の最大にして唯一無二の業績だ。

だから彼女の生涯は、本書の誕生とその後の影響以外にはめぼしい事件がない。1916 年にアメリカの地方都市スクラントンに生まれ、後にニューヨーク市のダウントウンに転居。高卒で文筆業を目指し、ジャーナリストとして当初より都市問題を中心に取材執筆を展開、『フォーチュン』誌の依頼で書いた「ダウントウンは人々のものである」(1956)<sup>\*3</sup>が注目を集め、ロックフェラー財団がそれを本にするため補助金を出し……そして執筆中にも、実際の再開発阻止運動に参加しつつ<sup>\*4</sup>、その経験も交えてこの本が生まれた。

本書は大反響を呼び、その後彼女は、執筆活動と並行して各種の再開発反対運動の大御所となる。一九六七年にはベトナム反戦運動で逮捕、翌年にはロウアーマンハッタン高速道路建設の公聴会で、騒乱の扇動罪で逮捕。同年にはベトナム戦争反戦でカナダのトロントに移住。その後も執筆を続け、2006 年に他界。年表的にはこんなものだ<sup>\*5</sup>。

<sup>\*3</sup> 邦訳はホワイト Jr, W.H. 編『爆発するメトロポリス』小島将志訳、鹿島出版会、1973, pp 130-156 所収

<sup>\*4</sup> Fishman, Robert “Revolt of the Urbs,” Ballon, Hillary and Jackson, Kenneth [eds] *Robert Moses and the Modern City: The Transformation of New York*, W W Norton, 2007, pp 122-9. ただし、本書刊行前の活動としてはワシントン公園貫通道路阻止運動が大きい、そこでの役割は本文中にも登場するシャーリー・ヘイズが中心であり、ジェイコブズは「歩兵」的だったとのこと (p 128)。

<sup>\*5</sup> 2010 年現在、彼女の伝記と呼べるものは三冊ある。Alexiou, Alice Sparberg, *Jane Jacobs: Urban Visionary*, Rutgers Univ Press, 2006; Flint, Anthony, *Wrestling with Moses: How Jane Jacobs Took on New York's Master Builder and Transformed the American City*, Random House, 2009; Lang, Glenna and Wunsch, Marjory *Genius of Common Sense: Jane Jacobs and the Story of the Death and Life of Great American Cities*, David R Godine Pub, 2009. だがいずれも内容的には似たり寄ったりである。これはジェイコブズが伝記作家への協力を一切拒み、出版社にも協力を禁じていたため、いずれも独自情報がないためである。読み物仕立てでおもしろいのは Flint だが、マンハッタンでの活躍に記述に限られる。それ以後のジェイコブズについて詳しく総合性があるのは

だが、本書とその影響は、年表の一行で書き尽くせるようなものではない。それは驚異的なできごとだったのだ。

## 2. 本書とその背景

### 2.1. 概要

さて、本書は都市計画や都市論における有数の古典だ。本書は、まず都市の魅力の源泉であるにぎわいとコミュニティの役割を明確にした。そして、それに必要な各種の物理的条件および人的条件を整理した。それまでのスラム撤去式ブルドーザ型の再開発 既存の建物を一掃して高層アパートを建て、オープンスペースを大量に作る団地型再開発方式を、都市の持つ美点を殺して衰退を招くものとして糾弾し、都市計画の理念にまでさかのぼった徹底的な批判を展開して、ボトムアップの都市再生を主張した。

ただし、その意義を理解するのは、一見したほど容易ではない。

こう書くと、意外に思われる方も多だろう。無機質で型にはまった巨大アパートは非人間的で、人間的な活気とにぎわいのある街のほうがいい こういうと、当たり前じゃないか、とだれもが思う。現場を見ず、人の生活を理解しない頭でっかちで利権まみれの役人や建築家どもに、人々の立場にたち生活に根ざした実感から、果敢にもノーをつきつけたジェイコブズ、という図式は実にわかりやすい。官僚テクノクラートの再開発はアメリカ大都市の死であり、そしてジェイコブズの提案は、アメリカ大都市の生を代表する存在というわけだ。日本でのジェイコブズに関する記述は、一つ残らずこの図式から一歩たりとも出てはいない\*6。

だが、これは必ずしも当時の実態のフェアな記述や理解とは言い難い。そもそも本書は研究書的な性格を持つものの、実際にアメリカ都市の状況を総合的に分析したわけではなく、少数の事例と伝聞にしか基づいていないのだ。そして当然のことながら、本書にはその時代背景があり、ジェイコブズはそれをわざわざ説明していない。だが本書はアメリカそして世界 の都市が、過去二世紀ほどの歴史の中できわめて特殊な状況におかれていた時期に書かれていた本だ。その特殊性を理解することは必要だろう。

### 2.2. 時代背景

まず、時代背景を。当時 というのは 1950 年代のアメリカ経済の絶頂期だ。人々の所得がぐんぐん成長する中、アメリカの都市は、未曾有の大郊外移転を経験していた。中産階級はこぞって、郊外部に作られた新興住宅地の一戸建てを買って移り住み、車中心の消費社会が確立した。若者たちはエルヴィス・プレスリーに熱狂。『バック・トゥ・ザ・フューチャー』の舞台を想像してもらえばいいだろう。

その一方で、都心部は見放されていた。ニューヨーク市では、世紀の変わり目から 1940 年までで人口は倍増した。十年でだいたい二割ずつの人口増だ。ところがその後人口の増

Alexiou だ。Lang and Wunsch はジュブナイル本で、情報量は少ない。

\*6 たとえば『地域開発』vol.503, 2006.8 のジェイコブズ追悼特集のほぼすべてのエッセイを参照。ただし矢作弘「偶像的な偶像破壊者」(pp 36-43) だけは例外的に、批判的な視点も交えつつバランスの取れた記述が行われている。また間宮陽介「都市の思想」、宇沢弘文、堀内行蔵編『最適都市を考える』東京大学出版会、1992, pp 15-43 所収における、異様なジェイコブズ絶賛も参照 (pp 30-43) も参照。

加は急激に鈍化し、40年代、50年代はそれぞれ一割も増えていない。第二次世界大戦後もその傾向は止まらないどころか、1950年代後半から60年代にかけて、何と人口は減少に転じる。まったく同じ現象が、サンフランシスコ市でもシカゴ市でもワシントン DCでもフィラデルフィア市でも、いやアメリカに限らず、ロンドンでもパリですら起きているのだ\*7。

過去二百年ほどで、戦争や大災害もない平和時に、都市　それもほとんどあらゆる都市　の人口が十年も減り続けるなど、空前の出来事だった。当時の都心は全体として、まったく魅力的ではなかったのだ。

ジェイコブズの本しか読んでいない人々は（いや実は残念ながら、この話を熟知しているべき都市計画の専門家すら）しばしばこれを誤解している。現代都市計画以前のアメリカ大都市（そして欧州の大都市）は、まったく問題がない、明るい活気に満ちた場所だったと思っている。いまのグリニッジ・ヴィレッジやソーホーや、素敵なカフェの並ぶあそこやこの、きれいな歩行者天国や上野アメ横などをイメージして「活気」とか「にぎわい」とか「多様性」とか口走っていることが多い。でも、当時の都心部はまったくそんな素敵などころではなかった。人々が我先に逃げ出す、ひどい場所がほとんどだったのだ。

これは現代都市計画に基づく再開発のせいで起こったことではほぼない。それ以前の話だ。住宅が量的にも不足し、しかもろくに便所もないような家だらけ、各種のインフラも未整備だった都市に、数十年で人口が倍増するほどに流入した結果として、都心部はかなりひどい状況になっていた\*8。そして、転出に伴う遺棄と荒廃、それに伴う治安の悪化、それが招くさらなる都心脱出のスパイラルは、止めようがないように見えた。もはや都市の時代ではないのだ、と当時は考えられていた\*9。都心部はもはや車社会に適應できない。建物も古くて、新しい時代に必須とされる設備（トイレとか）すら設置できない。これが当時の一般的な見方だった。ちなみに当時の人々のイメージする未来都市というのは、SFチックなつるピカの、プラスチックとロボットと自家用飛行艇と科学万能の世界だ。百年前に建ったトイレもない旧都心のこきたないレンガ造建築ですって？　ご冗談を。

つまりアメリカ大都市（そして世界の大都市）はすでに死にかけて、魅力を失っていた。本書で批判されている再開発も、そしてジェイコブズの提案も、その同じ問題に対する異なる取り組みだ。都市の衰退に対して、人々が当時圧倒的に支持していた郊外的な環境を都市に持ち込むことで再生を図ったのが各種のスラム再開発だ。それに対してジェイコブズは、都市には都市の魅力があることを主張し、またそこで行われる各種の活動が実は深くからみあっていることも指摘したうえで、それを強化することが都市再生の道だと主張した。今にして思えば、ブルドーザー再開発の手法は乱暴すぎたし、またそれを支えた法制度も問題が多かった。そしてジェイコブズの主張は実に鋭かった。だがそれは当時、今ほど自明ではなかったことはお忘れなく。

ちなみにその後1960年代末から、都市人口は世界中で回復に向かう。それは、ジェイ

\*7 各市の人口推移は、たとえば wikipedia の記述を参照。

\*8 これはあらゆる都市計画の教科書に書かれている。たとえば日笠端&日端康雄『都市計画』第3版、共立出版、1993、pp 36-46を参照。アメリカ以外の状況についてもこの前後にある。

\*9 たとえばホワイト、ウィリアム H. 「都市は反アメリカ的か」、ホワイト編『爆発するメトロポリス』（1956）pp 29-7所収は「一般に都市のイメージは現在非常に悪い　腐敗し、犯罪に満ち、そして不愉快な街路、そして居住人は貧乏人か、外国人か、あぶれ者である」（p 31）と述べる。

コブズの主張が全面的に取り入れられたおかげではない<sup>\*10</sup>。何が変わったかよくわからないままに、都市は復活した。都心居住は再び人気を取り戻し、それとともに都市の活気も戻ってきた。荒廃した再開発アパート群の多くも、今は本書で描かれたような荒廃とは無縁の普通の健全なアパートになった。その原因の分析は、この解説の範囲を超える。ただ本書でジェイコブズが論じたもの以外に、都市の活力や安定性にはもっとクリエイティブな要因が作用していることは指摘できるように思う。

### 2.3. 本書の意義：アマチュアの勝利

さて、歴史的な状況を見ると、当時の都市状況や再開発手法の位置づけが、多くの人のイメージとはちがうことを指摘してきた。だからといって本書におけるジェイコブズの天才的な洞察の価値は、いささかも揺らぐものではない。

当時の多くの再開発プロジェクトは確かに失敗だったし、それを省みずに同じまちがいを繰り返したのも事実。だがその程度の話ならちょっと観察力があればわかる。だからジェイコブズ以前にも、既存の各種再開発プロジェクト手法への批判はたくさんあった。画一的で、犯罪その他も増えて荒廃が目立つ等々。こうした批判の代表的なものは、前出のホワイト編『爆発するメトロポリス』にも収録されており、実は『死と生』でのジェイコブズの議論は、輝く田園都市批判などの基本主張からグリユエン報告などのもとネタに至るまで、かなりこの本から拝借されている<sup>\*11</sup>。

だが表層的な現象批判を超える分析はあまりなかった。むしろ個別の問題については優れた分析があった。本書でも引用されているリンチ『都市のイメージ』は、単調なブロックを並べただけの団地群は人々にとってイメージしにくくて記憶に残らないことや、車両交通の多い道路が地区を分断し、それが利用の低下をもたらすことを、実証的に示している<sup>\*12</sup>。またデザイン的な単調さについての文化人的な苦言は、いつの時代も一山いくら。でもそれは、再開発プロジェクトのある一面の問題でしかない。じゃあ都心を当時の絶望的な状態で放っておけというんですか、と切り替えされたら文化人たちは何も言えなかった。

それを突破したのがジェイコブズだ。本書は、個別の現象分析や文化人たちの愚痴をはるかに超える地平にまで到達した。本書のすごさは、表層的な議論をつきぬけて、そもそも都市の本質とは何かということまで掘り下げた批判を展開できたことだ。そして当時の再開発が潰そうとしていたものこそ、まさに都市の本質なのだと思事に示したのが彼女の手柄だった。

都市の本質とは、お互いに知らない人々が集まって、過度に干渉せずに関係を築けるということだ。その関係が、街路という公共的な場所を核として発達する。そしてその街路の公共性を保つのは、そこに張りつく多様な商業経済活動と、それが生み出す「ついで」の活動だ。買い物や雑用でやってきた人々が、ついでにその街路に人目を提供し、それが街路の治安を保つ。それが逆に地域の商業的繁栄にもつながる。用途規制や巨大開発などを通じた土地利用の純粋化は、そうしたついで活動を殺し、街路を殺し、結果として都市

<sup>\*10</sup> ホワイト編『爆発するメトロポリス』(1956)ですでに、一部の都心物件が価格高騰しつつあることが指摘されている(p 56)。本書刊行以前から、都心回帰の気運は盛り上がっていたものと推定される。

<sup>\*11</sup> Ibid. pp 14-16 [ハワード/田園都市理論批判]、p 97-100 [グリユエン]。

<sup>\*12</sup> リンチ、ケヴィン『都市のイメージ』丹下健三、富田玲子訳、1964、岩波書店

を殺してしまう。目に見える単調さやつまらなさは、その結果でしかない！

今してみれば、だれにでも思いつきそうな話だ。だが……ジェイコブズ以外は、だれも思いつかなかったのだ。そしてそれを可能にしたのは、彼女の観察力と総合力だった。それは彼女の、アマチュア性の勝利だったと言ってもいい。

アマチュアというと通常は悪口で、通常は無知で基本的な概念すら理解できていないという意味だ。だが二流の専門家よりはるかに知識も見識もあるアマチュアも、少数ながら確実にいるのだ。さらにアマチュアがアマチュアであるが故に、プロに対して優位性を持つ場合がある。まず、現象のストレートな観察。そして専門家たちが何らかのドグマにはまってしまっている場合。さらには問題が通常の学問領域におさまりきらない場合だ。1950年代から60年代にかけての都市問題は、このすべての条件が揃っていた。ジェイコブズの本書は、まさにその間隙を縫って登場してきたものだった。

本書の根底にあるのは、実際の都市 特に彼女自身が住んでいる街路や、その周辺のグリニッジ・ヴィレッジの詳細な観察だった。専門家の観察は、通常は事前の仮説に沿った、何らかの特定の側面に着目して行われる。それにあてはまらないものは、記録されない。だがジェイコブズには特定の仮説はなかった。それ故に彼女は、実際に起こっていることをあまり取捨選択せずに記述できた。それが本書の第二章に描かれ、しばしば引用される、ハドソン通りの「バレー」の生き生きとした見事な描写だ。彼女のすべての(正しい)洞察は、こうした観察がもとになっている。

そして当時の都市計画が、ある種のドグマに陥っていたのも事実だ。それにはそれなりの理由があったことはすでに述べたが、それでもドグマはドグマだし、アプローチは紋切り型で、かれらの持っていたモデルは都市の重要な側面を捕らえ切れておらず、したがってそれについての配慮はまったくなかった。これは本書で執拗に批判されている通りだ。

だがジェイコブズがアマチュアの最大の優位性を発揮できたのは、何よりもその総合性という点においてだ。本書は、既存の学問や行政領域の区分など一顧だにしない。目先の都市デザインや建築設計だけの話ではない。地域の産業構造、人の通行、街の安全、それを支える街路形態、開発制度、その背後の金融、政治組織、住民運動 都市開発に関係するありとあらゆる側面がつまこまれている。そしてそれらの密接な関係が、実に入念に描き込まれている。

これは当時 いや今も どんな専門家にも書けない。個別の立場から、建築やら産業やら治安やら金融やらの専門家による論集を作ることはできる。だが、本書が扱っていた問題は、そうした個別領域よりも、その総合的な絡み合いの中にあり、したがって論集では決してとらえきれない。これは既存の学問領域にとらわれることのないアマチュア

それも博識で異様な観察力を持ち、専門家など屁とも思わない生意気で蛮勇に満ちたアマチュア にしか書けない本だった。

もちろん、そんな便利なアマチュアがそうそう転がっているはずもない。こうした異様な能力を持ったジェイコブズというアマチュアが、あのタイミングであの場にいたのは、まさに奇跡。本書は、そうした奇跡の産物である。

また本書のすごさは、都市問題についての洞察にとどまらない。数十年後まで普及はおろか発見もされない重要な概念や知見に、独自に到達しているのだ。

たとえば本書でのジェイコブズの主張というのは、都市およびその活力というのが積み上げやサンプル抽出では把握しきれない、数多くの機能や人々の複雑なからみあいから生

じる、複雑系の創発的な秩序なのだということだ。もちろん、複雑系や創発などという概念が普及したのは、せいぜいが1990年代からだろう\*13。だがジェイコブズはその30年も前に、そうした発想に自力でたどりついていた。そこに問題そのものの枠組みのちがいがあつたことを看破し、必要とされる別のアプローチの方向性まで指摘できた。それがやがて複雑系や創発問題と呼ばれることになる独特の分野であることを的確に見抜き、その開祖とされるウィーバー論文まで勝手に見つけてくる。その嗅覚は驚くべきものだ。

また信じられないことだが、彼女は、いまはやりのネットワーク理論にも独力で到達している。第6章で、彼女は都市における人的ネットワークの重要性について述べている。成功しているコミュニティでは、何人かやたらに顔の広い人が核となっていること、実際のコミュニティ活動において他のコミュニティとの連帯が必要になったとき、重要な役割を果たすのは周縁部にいる、関係の薄い人であること。

ピンとくる方も多いだろう。これはまさにその後ネットワーク理論で発見される、ハブと弱いつながりの重要性そのものだ。これまた1970年代に、アイヒマン実験で有名なスタンレー・ミルグラムが先鞭をつけ、1990年代になって、バラバシやワッツやストロガッツがスモールワールドモデルを通じて示した知見だ\*14。だがジェイコブズは、そうした長い研究の果てに出てくるネットワーク理論の結論を、1960年代初頭の段階で独自に見つけ出しているのだ。アマチュアなのに / アマチュアだからこそ！

彼女のこのアマチュア性は意識的なものだった。彼女は徹底して肩書き的な権威を否定し、普通の人であろうとした。彼女は自分の伝記を嫌がり、伝記作家に一切協力するなど出版社にまでお触れをまわしていたという\*15。また各種の大学からの名誉学位などの話もすべて断っている。実はこうした意識は、本書の索引にも反映されている。人名に注目してほしい。「ル＝コルビュジエ」「ジェファソン」といった偉い人々とまったく同じ扱いで、「ジャッフェさん」「コストリツキー夫人」といった人々が並んでいる。ジェイコブズにとっては、こうした「無名の人々」も名前のある存在であり、著名な建築家や大統領と対等なのだ。

また、彼女は市民活動家ではあつた。が、そうした活動家が陥りやすい、半可通の紋切り型にもはまらない。公園は酸素を作るといった、お手軽エコロジスト的な俗説は容赦なくひねり潰す。最終章での自然に対する感傷への警鐘は、近年はやりのそうしたエコっぽい妄言への強力な批判だ。子どもたちが安全に遊べる公園を、といった主婦のお題目も一蹴。無批判に美化されがちな母親の愛情だの女性原理だのを、むしろ都市にとっては有害でブルドーザー型再開発の一因なのだと断言するジェイコブズの冷徹さ加減は、空恐ろしいほどだ。

そしてまた、都市に関する市民運動といえば、景観保全や伝統的建築物保存、町並み美化といった話をするのが普通だ。だが彼女は本書でそれを明確に否定している。デザイン

\*13 たとえばウォルドロップ, M. ミッチェル『複雑系』田中三彦, 遠山峻征訳, 新潮社, 1996 などが有名。また創発系ではジョンソン, スティーブン『創発』山形浩生訳, ソフトバンク, 2004 が、創発概念の解説と同時に本書の創発的な先駆性を指摘している (pp 49-50, 94-101)。ただし創発問題自体の考察は浅い。創発概念自体は昔からあつた。マンフォードは驚異的にも1961年の『歴史の都市 明日の都市』(邦訳生田勉訳, 新潮社, 1974) で、はやくも都市の「創発」的側面を指摘している (p.88, 96)。

\*14 ここに挙げた個別研究者の著書はどれもおもしろい。それをまとめた概説書としてはブキャナン『複雑な世界, 単純な法則』阪本芳久訳, 草思社, 2005 など。

\*15 Alexiou, p 7

の統一性なんて、村落的な権威主義の反映であり、都市的ではない、と彼女は第十九章で語る。古い建物の重要性がうたわれているので、本書を何やら伝統的建造物保存の口実に使いたがる人も多い。でも実は彼女の主張は、一般的な伝建保存の正反対だ。彼女にとって古い建築の重要性は、一義的にはそれがお金をかけるべき、おきれいで貴重なものだからではない。古いから家賃が低く、まわりと不調和で、大切にする価値など皆無で好き勝手に使えるからなのだ。

この意味で、彼女は徹底して自分の観察と思考だけを武器に活動を続けた、真の意味での市井の人であり、徹底して我流の見事なアマチュアだった。我流は無型と言う<sup>\*16</sup>。彼女にも型はなかった。そして本書は、そうした天衣無縫のアマチュアにしか実現し得なかった成果の集大成なのである。

#### 2.4. ただし…… :ジェイコブズの弱点

しかしながら、本書には　そしてジェイコブズには　弱点もある。それはやはり、彼女のアマチュア性の持つ欠点であり、守に転じて威を失うとされる<sup>\*17</sup>我流故の弱点だ。

まず具体的に直接観察できたものについてのジェイコブズの直感と洞察は、恐ろしいものがある。だがそこから離れて自分では観察していないもののお話をするとき、彼女はその鋭さを失う。

たとえば5章、フィラデルフィア市のワシントン広場の話。この公園は1950年代に変質者ばかりがたむろする場となり、それが10年も続いたというのだ。でも、変質者なる人々の行動を少しでも考えてみれば、これはずいぶん変な話だ。変質者には、十分な数の非変質者が必要なのですもの。露出狂は「キヤー」と言ってくれる観客が要る。痴漢は痴漢される相手がいる。出歯亀には、のぞかれる行為に及ぶ恋人たちが必須だ（東大出歯亀研究会の調査では、日本の出歯亀たちはそのために各種の場所をしつらえ、恋人たちに嫌われる他の変質者たちを追い払う等の涙ぐましい環境整備努力をかけるとか<sup>\*18</sup>。変質者だけが利用する公園というのはあり得ないのに、彼女はあっさりそれを見過ごす。そしてよく読むと、ジェイコブズはこの公園を自分では観察してはいない。

彼女もこの弱点は自覚しているようで、各種の議論はなるべく自分の知っている事例を元にしている。だがそのために、本書では少数の事例がやたらに使い回される。その少数の事例をどこまで一般化していいのか？ 本書ではデータによる裏付けはほとんどない。したがって、彼女の分析がどこまで妥当性があるのか、実はよくわからないのだ。

本書の第二部では、都市に多様性と活力をもたらす四つの条件が挙げられる。「複数の一次用途を持っていること」「街区が短いこと」「新旧の建物が混在していること」「人口密度がある程度あること」。多くの人、これが網羅的なサーベイの結果だと誤解している<sup>\*19</sup>。でも実際には彼女が少数の事例を見て、「なんか直感的にこんな気がします」と言っているだけなのだ。ジェイコブズに対する大きな批判もここにある。彼女は自分の身

<sup>\*16</sup> “風の” ジュウザ談話、武論尊&原哲夫『北斗の拳』第13巻、集英社1987、p.142で引用。

<sup>\*17</sup> ラオウ（拳王）談話、ibid, p.188で引用。

<sup>\*18</sup> 東京大学出歯亀研究会『出歯亀生態学』私家版、1980。

<sup>\*19</sup> たとえば小島寛之「魅力的な都市とは～ジェイコブズの四原則」WIRED VISION, 2008/01/24, <http://wiredvision.jp/blog/kojima/200801/200801240100.html> は「ジェイコブズは、アメリカの代表的な都市について、第二次世界大戦前後の都市開発を具に調査・分析し、魅力的な都市の備える4条件を見出した」（引用ママ）と書いている。

近なところ ニューヨーク市のグリニッジ・ヴィレッジ を見て、その特徴を述べているだけだ\*20、と。

むろん天才の直感は侮れないものだし、確かにこうした特徴があるとよさげだ。だが本当に活気ある街はすべてこうした特徴を備えているのだろうか？ また、こうした条件を作ればどこでも（統計的に有意に）活気を回復しますか？ わからない。というか実は、多様性や活気をもたらす条件を都市の物理特性に過度に求める発想は、そもそも無理があるのだ。

たとえば彼女は、多くの公園の荒廃を再開発計画の物理的な設計のせいにする。だがその同じ公園は、物理的な条件は何ら変わらなかったのに、しばらく前には多くの人々が利用し、活気に満ちていたそう\*21。ちなみに現在もそれらの公園の多くは物理的には同じだが、何も問題はない。おそらくジェイコブズの指摘も一理はある。だが一理しかない。他の原因のほうが大きく作用しているはずなのだ。これは都市全体についても言える。すでに書いたとおり、あらゆる都市は60年代末から都心部が再興を見せている。彼女が批判した荒廃する再開発プロジェクトも、物理的にはほとんど変わらないのに、その後健全な状態に戻った。なぜだろうか？ ジェイコブズの分析では、これは説明がつかないのだ。

さらにその物理条件も、実際に調べたり作ったりしようと思うと途方にくれる。早い話が「街区が短い」というとき、どのくらいが「短い」の？ 高い人口密度はどのくらいがお望みで？ ジェイコブズは具体的な数値について言及をなるべく避けて、とにかく多様性が高まるくらい、といった逃げを打つ。でもそれはずるい。

さらに彼女のいう「多様性」って何？ 秋葉原は電気屋とメイド喫茶ばっかですが、「多様」ですか？ 本書の中でも、地元のパン屋がでかくなって規模拡大するのはダメだという。どうして？ 雑貨屋はいいけれどスーパーはダメだという。なぜ？ 実は彼女の言う「多様性」というのは結構恣意的だ。彼女の議論の多くには、こうした重要な概念について実用的な定義がほとんどない。どれもわかったようで、突き詰めるとよくわからないのだ。

定義のない印象批評、きちんとした調査やデータの不在。目先の少数の例をもとにした過度の一般化。これはアマチュア談義の欠点とされるものだが、ジェイコブズもそこから逃れられていない。そしてそれ故に、彼女の出す具体的なアイデアの実効性については、必ずしも評価は高くない。ジェイコブズを絶賛している彼女の伝記ですら、「分析としてはブリリアントだが、各種の処方箋についてはそれほどではない」と書いているほどだ\*22。

## 2.5. 本書の影響

こうした長所と短所を兼ね備えた本書は、発表と同時に良くも悪しくもすさまじい反響を呼んだ。当然、当時の再開発に飽き足りない人は絶賛した。一方で、これまた当然ながら、既存の都市計画家たちにはいたく評判が悪かった。が、その業界の中でも、彼女の主張に一理あることは多くの人々が不承不承ながらも認めた。高名な都市文明評論家のルイ

\*20 たとえば Mumford, Lewis “Mother Jacobs’ Home Remedies for Urban Cancer” *The New Yorker*, 1962/12/01, p 162; Shwartz, Joel “Robert Moses and City Planning,” Ballon & Jackson, pp 130-3 などを参照。

\*21 Mumford, pp 162-3.

\*22 Alexiou, p 93.



ス・マンフォードは(本書で罵倒されたせいもあり)かなり辛辣な書評を書いたが<sup>\*23</sup>、その書評の中ですら本書が数多くの点で重要な視点を持っていることは認めている。そしてもちろん、好き嫌いを問わず本書は多くの実務家に読まれたし、その発想に影響を与えている点は、本書の新版への序文にも書かれた通り。

その序文は、本書の影響について懐疑的だ。だがそれは謙遜、あるいは彼女らしい意固地な完璧主義の反映と考えるべきだろう。それに本書はむしろ、もっと大きな都市計画見直しの波の中で、一つの結節点として理解したほうがいい。ブルドーザー型の都市再開発に反対する声は、本書刊行前から高まりつつあった。そもそもロックフェラー財団が本書執筆のための資金提供をしたということ自体が、それを如実に示している。本書はそうした漠然とした運動に、理論面や実践面での裏付けを与えた存在だった。

本書で批判されているニューヨーク市のプロジェクトの多くは、アメリカ住宅法タイトル1という条項に基づいたものだ。この法制度は、民間デベロッパーの積極的な活用と、強制収容権、連邦予算による補助、税制上の優遇措置を通じた再開発の積極的な推進を目指す法制度であり、本書でもときどき名前が出てくる(そして一般にはジェイコブズの仇敵とされる)ロバート・モーゼス(ニューヨーク市の建設行政を34年にわたり支配した人物)は、この制度を見事に活用して多くの再開発を実施した<sup>\*24</sup>。

だがやがてこの手法への批判が強まり、1959年にはニューヨーク市長の命を受けて、アンソニー・パヌチが、既存プロジェクトの見直しを行っている(本書16章で引用されているのはその報告書だ)。風向きを敏感に察知したモーゼスは、1960年にパヌチの報告書が出る前にスラム取り壊し委員会を解散させて、スラム再開発の時代は終わったと宣言<sup>\*25</sup>。つまり本書の批判対象は、実は本書が出た時点ですでにピークを過ぎていた。その意味で、本書は時代を作ったと同時に、時代の子でもあった。

ジェイコブズは以前から都市再開発批判で一目おかれる存在であり(第十章を見ると、当時からデベロッパーたちは彼女にご意見伺いをしていたことがわかる)また多くの都市開発反対の市民運動、特にグリニッジ・ヴィレッジ周辺の活動では著名だった。彼女はモーゼスの提案のいくつかに対し、自分の地区を越えた広範な声を組織することで対抗し、それを見事につづしている。本書はそうした活動の成果のまとめでもあり、その手法論でもある。本書の刊行によって、こうした再開発反対運動は勢いを増したし、住民参加などの手続きも充実してきた。これは本書を取り巻く流れがもたらした大きな変化だ。

そして本書の流れによって都市計画の考え方もだんだん変化してきた。従来の、用途の明確な区分を重視するゾーニング(用途地域)制度についても、以前ほどは自明とはみなされなくなった。日本でも、都心部の開発に住宅付置義務などが課され、限定的ながらも複数用途の混合をある程度進めるべきだという発想は浸透してきた。多くの活動の相乗効果というアイデアはいまの大規模開発ですでに常識となっている。人の動きを考えた、回遊性のある地域づくりも、いまやわざわざ言うまでもない発想となっている。

ミクロナ個別例を見ても、屋台による商業の導入というアイデアは90年代に一世を風靡した開発コンセプトである、フェスティバルマーケットプレイスで活躍した。また彼女はフルトン魚市場の隣の埠頭に、船舶博物館を作ったりシーフードレストランを作った

<sup>\*23</sup> Mumford, pp 148-179.

<sup>\*24</sup> Ballon, Hilary "Robert Moses and Urban Renewal: The Title I Program," Ballon & Jackson, pp 94-115 所収

<sup>\*25</sup> Ballon, Hilary "Future Title 1 Projects," Ballon & Jackson, p 305 所収.

り、というアイデアを本書で出しているが、いまやそこはピア 17 となり、まさにジェイコブズの提案通りの、船舶博物館と商業開発の組み合わせで大成功をおさめている。むしろ、関係者が本書のアイデアを二十年後に直接パクったわけではないだろう。だが彼女のアイデアの冴えと長期的な有効性は如実に示されている。

一方で、本書に勇気づけられた市民運動の高まりで行政が弱腰になり、インフラ投資が軽視され、専門家の有益な意見まで否定されてしまい、いまや過度の住民エゴが都市の発展を阻害している、という批判もきかれる。前出のロバート・モーゼスは、その強引な手法こそ嫌われたものの、現代ニューヨークの骨格となる多数のインフラを整備した。そしてそれは 1960 年代以降のニューヨークの復活に（ジェイコブズよりもずっと）大きく貢献した。いまやモーゼスに対する再評価の声も盛り上がりつつある<sup>\*26</sup>。もちろん、住民エゴまでジェイコブズのせいにするのは酷だ。しかし本書がそうした動きにお墨付きを与えているのもまちがいない<sup>\*27</sup>。ドグマを否定した彼女が、新たなドグマに貢献する皮肉ながら、これも歴史の必然なのかもしれない。

なお、蛇足を一つ。このロバート・モーゼスは向かうところ敵なしの、ニューヨーク都市開発の帝王だったが、そのきわめて批判的な 1,300 ページの伝記、カーロ著「パワーブローカー」(1974)によると、かれを倒したのはネルソン・ロックフェラー（当時ニューヨーク州知事、後にアメリカ大統領）だったという<sup>\*28</sup>。さてジェイコブズの活動もモーゼスの勢力失墜にはわずかながら貢献したのだが（とはいえカーロのモーゼス伝で一度も言及されない程度<sup>\*29</sup>）、本書の執筆に資金提供したのはロックフェラー財団なのだ。あまり深読みするのはアレだが、案外ここにはおもしろいつながりがあるかもしれない。

### 3. 本書以後のジェイコブズ

#### 3.1. 地域経済成長の理論？：アマチュアの失速

さて、ここからは本書を離れて、その後のジェイコブズの活躍について手短かに語ろう。『アメリカ大都市の死と生』に続き、彼女は産業経済論とも言うべき本を二冊書く。『都市の原理』（原題は「都市の経済」）と『都市の経済学』（原題は「都市と国富論」）だ。私見では、もはや現代的な価値は低い。だが今なおこの二冊を高く評価する人もいる<sup>\*30</sup>。さらに執筆時点 60 年代末から 70 年代初頭 においては、いずれの本も先駆的な洞察を備えていたのも事実だ。そして同時に、彼女の限界をも如実に示していた。

『都市の原理』（1969）<sup>\*31</sup>で、ジェイコブズはまたもや既存の学問を完全に否定するのだ、

<sup>\*26</sup> Ballon [eds] *Robert Moses and the Modern City*, W W Norton, 2007 の各種論考を参照。また Teaford, Jon T. “Caro versus Moses, Round Two: Robert Caro’s *The Power Broker*”, *Technology and Culture*, Volume 49, Number 2, April 2008, pp. 442-448 も参照。

<sup>\*27</sup> Schwartz, p 133.

<sup>\*28</sup> Caro, Robert *The Power Broker: Robert Moses and the Fall of New York* Vintage, 1975

<sup>\*29</sup> ジェイコブズの支持者は、彼女をモーゼス最大の仇敵として描きたがる。たとえば Flint *Wrestling with Moses* および Gratz, Roberta, *The Battle for Gotham: New York in the Shadow of Robert Moses and Jane Jacobs* Nation Books, 2010 参照。しかしモーゼスの頓挫したプロジェクトは無数にあり、ジェイコブズの関与などごく一部だ。モーゼスに対して異様に批判的なカーロの伝記ですら彼女にまったく言及していないのは、客観的な評価として妥当なところだろう。

<sup>\*30</sup> たとえば稲葉振一郎『増補 経済学という教養』ちくま文庫, 2008, p 368-80 における絶賛を参照。

<sup>\*31</sup> Jacobs, Jane, *The Economy of Cities*, Vintage, 1969, 邦訳ジェコブス『都市の原理』中江利忠, 加賀谷洋一訳, 鹿島出版会, 1971.

と胸をはる。いまの学問は、文明ではまず農業が栄え、その生産力をもとに都市が成立するのだと決めつけている、と彼女は述べる。でも実は、農業以前にも黒曜石などの交易集落があり、そこでの活動をもとに、その周辺の農地用の農具生産や技術革新が行われて農業も発達したのだ。だから都市が先で、都市が農業を支えたのだ！

だが実は、マンフォード『歴史の都市、明日の都市』(1961)のような通俗書ですら、農業以前から重要で大規模な定住集落があったことは強調しているので<sup>\*32</sup>、これは彼女の言うほど目新しい話ではない。さらに実はこの話、その後の本題と何の関係もないのだ。この本の主眼は都市における産業分化と多様化のプロセスだ。女性用着付け屋さんがあるときブラジャーなるものを考案し、それをおまけで作っているうちにブラジャー生産という新しい産業ができる、という具合。そういう新しい工夫を生み出せることが都市の強みだ、という。成長する都市は輸入していたものをやがて自分で作るようになり(輸入代替/輸入置換)、そこで発生する創意工夫がまた新しい発達を生み出し、産業が多様化して、中小企業が大量に生まれ、内需拡大につながることで成長が生まれるという。

さて、これは事実だ。そして当時は、こうした認識は経済学の中でもほとんど普及していなかった。比較優位論に基づく、単一産業特化のほうが重視されていた時代だ。経済学者ロバート・ルーカスは、本書を都市の外部性や人的資本についての考察だと看破し<sup>\*33</sup>、これはその後の経済学発展の重要な方向性となった。それをまたも自力で考案したジェイコブズの眼力はすごい。だが一方で、都市や産業によって輸入代替の発生やその部門は異なる。製造コストや量産メリットや集積メリットなど、それが起こる条件を多少なりとも整理しないと、一般論にとどまってしまう。『都市の原理』はそこまでは至っておらず、いま読むとかなり物足りない。

その次の『都市の経済学』(1974)<sup>\*34</sup>は、こうした批判に答えようとした本なのかもしれない。が、その議論はきわめて混乱している。この本もまず、既存学問のなで斬りから入る。ジェイコブズは最初の一章で、既存経済学を全否定するのだ。アダム・スミス、ケインズ経済学、マネタリストも新古典派も、ついでにマルクスまで。その根拠は？ そのどれも、スタグフレーション(景気停滞/失業増加と、インフレが同時に発生すること)が説明できないから。

さて、これは70年代当時はかなりよく聞かれた経済学破産論だったという。だがスタグフレーションがうまく説明できないだけで、経済学のすべてを否定していいの？ そしてそれなら、ジェイコブズの理論はスタグフレーションを見事に説明できるんだよね？

ところが驚いたことに、この本にはその後スタグフレーションについての議論は一切出てこない。そして、経済発展には輸入代替をする都市が重要だというのをひたすら繰り返し続ける。輸入代替とは『都市の原理』にも出てきたように、輸入していたものを自前で作るようになる、という話だ。だがその議論には裏付けがまったくない。輸入代替する都市がないとその経済は栄えないという。なぜ？ あそこが没落したのは輸入代替しなかったから、という羅列はあるが、それが本当に決定的かどうかというまともな検証なし。彼

<sup>\*32</sup> マンフォード、pp 81-7.

<sup>\*33</sup> Lucas, Robert E. Jr. "On the mechanics of economic development", *Journal of Monetary Economics* 22, 1988, pp 3-42. ジェイコブズへの言及は p 37.

<sup>\*34</sup> Jacobs, Jane, *Cities and the Wealth of Nations*, Vintage, 1974, 邦訳ジェイコブス『都市の経済学：発展と衰退のダイナミクス』中村達也、谷口文子訳、TBSブリタニカ、1986.

女がそう思えばそうなのだ。

そしてそれがそんなに重要なら、どうやったら都市は輸入代替できるようになるの？ 設備投資できるように外国や政府が融資や援助したら？ それは地域外部の金に依存するからダメ。工場誘致や技術指導は？ 外部に頼ってるからダメ。唯一いいのは、工業製品に関税をかけて地元産品の価格競争力を高める保護貿易(!!)だが、それでもだめなものだめ。シリコンバレーもだめ。とにかくその都市が自発的に、自分の工夫で輸入代替を始める以外はだめらしい。つまり経済発展は政策的には起こせず、勝手に起こるのを待つしかない、ということだ。

そして最後に突然、アメリカの都市はもうイノベーションがなくて衰退するしかなく、ヨーロッパも同様だ、世界中このまま都市がつぶれて文明も崩壊するんじゃないかという悲愴な見通しを述べてこの本は終わる。おい、ちょっと待てやコラ！

この二冊には、前出のアマチュアの欠点が全開だ。裏取りや実証性の弱さ。目先の小話の過度な一般化。あいまいな定義とたとえ話に終始、議論がぼやけて実用性がない。

さて、これは彼女の話がまちがっているということではない。多様な中小企業による地場産業ネットワークの多様化の意義については、このジェイコブズの二冊でも参照されている MIT のチャールズ・セーブルの研究などが多くの成果を挙げている。セーブル&ピオーリ『第二の産業分水嶺』<sup>\*35</sup>はその一つの集大成だ。またジェイコブズの否定するシリコンバレーでも同じ構造が発展の原動力となっていることは、サクセニアンが『現代の二都物語』<sup>\*36</sup>で分析しているとおり。さらに日本産業や中国産業を支える中小企業ネットワークの重要性は、関満博の『フルセット型産業構造を超えて』<sup>\*37</sup>を始めとする多くの著作が分析を加えている。着目点はいいし、時期的に見れば先駆的だったとさえいえる。

しかしながら、ジェイコブズの議論はあまりに漠然としており、根拠もなく話が極端に飛びすぎた。多様性は重要だろう。でも、どのレベルで？ ちがう業種の小企業がたくさんあるのがいいのか、それともある程度企業内で内製化をすすめた中企業がたくさんあるのがいいのか？ また規模の経済とのバランスはどうやって考える？ 実際の経済分析や政策の是非を考えるのに必要な手がかりが、彼女の議論にはほとんどない。そして「都市の経済学」の、打つ手は何もありませんという話に至っては……どうしましょ？

そんなわけで多くの方は、その後のジェイコブズには何ら期待していなかった。ちなみに彼女にはもう三冊、著書がある。 *The Question of Separatism: Quebec and the Struggle over Sovereignty* (1980)<sup>\*38</sup>、 *A Schoolteacher in Old Alaska* (編纂、1995)<sup>\*39</sup>、 *Girl on the Hat* (1989)<sup>\*40</sup> だ。だが、特に話題にもならなかった。

行きがけの駄賃で簡単に触れておくと、 *The Question of Separatism* は、彼女が移住したカナダのケベック州独立についての著書だ。ケベック州はカナダの中でフランス語も公用語となっており、昔から分離独立の話は絶えない。彼女は独立を支持する立場だが、

<sup>\*35</sup> セーブル&ピオーリ『第二の産業分水嶺』山之内靖、石田あつみ、永易浩一訳、筑摩書店、1993 (原著 1984)。

<sup>\*36</sup> サクセニアン『現代の二都物語』山形浩生、柏木亮二訳、日経 BP、2009 (原著 1992)。

<sup>\*37</sup> 中公新書、1993。

<sup>\*38</sup> Random House, 1980。

<sup>\*39</sup> Jacobs [ed], Hannah Breece, *A Schoolteacher in Old Alaska: The Story of Hannah Breece*, Random House, 1995。

<sup>\*40</sup> Oxford University Press, Toronto, 1989。

この本での議論はちょっと見通しが悪い。既存の分離独立派の主張は怪しげだと批判する一方で、独立したら地元企業も限られた市場の中で多様性を増すようになるし、また新しい行政上の試みも出てくるだろうと述べて、独立を支持している。

*A Schoolteacher* は、大叔母ハンナ・ブリースの手記をジェイコブズが編纂したものだ。ハンナ・ブリースは 20 世紀初期に、併合直後のアラスカで学校の教師を務めていた。いわばアメリカによるアラスカ植民地化の尖兵ですな。おもしろいエピソードや記述も散見はされるが、ジェイコブズのコメントは限られたものだ。そして最後の *Girl on the Hat* は、親指大の女の子が人々の帽子にのっかってあれこれ騒動に巻き込まれるという子ども向けのお話だ。これまた特筆すべきものではないので、だれも特筆しなかった。

だが、多くの人の期待（またはその不在）を裏切って、彼女はもう一冊、刮目すべき本を書いた。それが『市場の倫理 統治の倫理』（1992）<sup>\*41</sup>だ。

### 3.2. 社会統治の原理：アマチュアの中興

『市場の倫理 統治の倫理』は、社会のガバナンスの原理を整理した本だった。そしてその洞察は数行でまとめられる。社会はいろいろな仕組みで統治制御されている。だがその統治や制御を律する原理には、相容れない二種類がある。一つは権威と規則で律する統治の原理。もう一つは交渉と取引により合意を探る市場の原理。この両者は相容れない。だが社会にはこの双方が必要である。

これまた、当然のように見える議論だ。だが本書と同じく、これまただれもまともな形ではっきり論じることがなかった論点だったのだ。1980 年代から、サッチャリズムの影響などもあり、政府などもう要らずすべて市場原理に任せるべき、という議論が台頭。そして 1989 年のベルリンの壁崩壊から社会主義の敗北を経て、90 年代初頭にはその議論がほぼ無敵だった。これまで政府に任せていた発電や通信はおろか、監獄や軍や教育もますます市場に任せようとしていた頃だ。だがそこでジェイコブズは、両方いるのだ、ということを確認して述べた。両者はちがう原理に基づいている。その両者はきちんと分けなくてはならない。それをへたに混ぜることで、大きな混乱と問題が生じるのだ、と。

彼女の議論は、単に政治や普通の行政にとどまらない。それは NGO や NPO の規範にもかかわる話であり、企業内のガバナンスにも適用される。これまた、通常は全然ちがうと思われる領域を自由に行き来できる、アマチュアならではの強みが存分に発揮された一冊だった。そしてアマチュアの欠点が、ここでは問題にはならない。倫理や原理原則についての議論は、データの裏付なしで事例の羅列で展開しても何の問題もない。その議論は商業活動とボランティア活動の関わりやフリーソフトと商業ソフトとの関係、宗教団体やグーグルのビジネスモデルなどにも応用できる。

この本には多くの人が強いインパクトを受けた。最近でも、松尾匡『商人道ノス、メ』（2009、藤原書店）がこのジェイコブズの図式を敷衍している。75 歳にしてこれほどのものを世に問えるとは、ジェイコブズ恐るべしというのが多くの人の印象だった。

<sup>\*41</sup> Jacobs, Jane, *Systems of Survival: A Dialogue on the Moral Foundations of Commerce and Politics*, Vintage, 1992, 邦訳『市場の倫理 統治の倫理』香西泰訳、日本経済新聞社、1998.

### 3.3. 晩年のジェイコブズとその他の著書

が……その後彼女が書いた二冊は、またもやアマチュア議論の欠点ばかりが目につく惨憺たる代物となった。「経済の本質」(1997)<sup>\*42</sup>は、再び経済学批判の本だが、そもそも批判対象の経済学についてあまりに勉強不足。さらにあいまいな概念を濫用し、安易なアナロジーにばかり頼り、少数の事例を過度に一般化することで、この本はきわめて無力なものとなりはてた。これについては、大経済学者ロバート・ソローも苦言を呈している。  
<http://cruel.org/econ/solowonjacobs.html>

そして彼女の遺作となった「壊れゆくアメリカ」(2004)<sup>\*43</sup>は、それに輪をかけてひどい本だった。文明は現在崩壊の兆しを見せており、それがコミュニティ崩壊や科学軽視や一部の公共支出削減に現れているという本だ。だが各種問題点は新聞の切り抜き事例をいくつか挙げる以上の裏付けはなく、そうした問題点がなぜ文明崩壊とまで言えるのかについても説明は皆無。これについてのぼくの評価は以下に述べた。  
<http://cruel.org/reading/darkage.html>

彼女はその後間もない二〇〇六年に他界したが、この二冊の後で、ぼくは不謹慎ながらそれを惜しいとは思わなかった。

## 4. まとめ

だがこうして振り返ってみると、やはりジェイコブズはすさまじい人物であり、まごうかたなき天才だった。『都市の原理』『都市の経済学』も、時代的な文脈の中ではそれなりの意義をもっていたし、また晩年の彼女の著作は、彼女の果たした役割をいささかも貶めるものではない。だれしも打率百パーセントではないというだけの話だ。

本書『アメリカ大都市の死と生』は、発表当時はおろか、いまなおその価値が衰えない希有な書物だ。従来はあまり顧みられなかった一般の人々の洞察をすくいあげ、そしてそれが専門家たちの(必ずしも完全に否定されるべきものではないにせよ)ドグマに十分拮抗しうることを示した。本書は都市に対する見方を永遠に変えた。他にこれだけの力を持った本といえば、本書で(不当にも)罵倒されているエベネザー・ハワード『明日の田園都市』くらいだろうか(ちなみに、これまたアマチュアの手になる本だ)。

むろん、本書の内容を鵜呑みにすることは慎まなくてはならない。極論もあるし、今考えると当たっていない部分や不十分なところもある。だが半世紀後のいまなお、本書には学ぶべき視点が多い。その都市の本質をめぐる議論は十分有効だし、また都市理解にあたって彼女が採用した、本当の意味での総合的な考察の力は、過度の専門分化が進む現代においてはなおさら大きな問いをつきつけている。

そして『市場の倫理、統治の倫理』もまた、同様の力を持った本だ。おそらく人が今後とも絶滅するまで格闘し続けるであろう社会統御の問題に、彼女は明解な視点を投げかけた。しかも、時代がまさにそうした視点を否定しつつあったときに。むろん、これは『死と生』ほどは一般受けしない本だ。にも関わらず、その視点は「市場か政府か」といった

<sup>\*42</sup> Jacobs, Jane, *The Nature of Economies*, Vintage, 1997, 邦訳『経済の本質』香西泰、植田尚子訳、日本経済新聞社、2001.

<sup>\*43</sup> Jacobs, Jane, *Dark Age Ahead*, Vintage, 2004, 邦訳『壊れゆくアメリカ』中谷和男訳、日本 BP 社、2008.

不毛な二者択一をたしなめて、生産的な社会のあり方に示唆を与えてくれる。

だが、こうした著作以上に、これらを書けたジェイコブズ自身が、いまなおアマチュアが持つ可能性を身をもって実証した希有な存在だった。強靱な観察力と十分な思索力に少々の運さえあれば、地位や学歴などまったく関係なく、専門家に負けないどころか、専門家など及びもつかないものを作り出すことが可能なのだ、と彼女は教えてくれる。むろん、そこにアマチュアの落とし穴は常に待ち構えてはいるのだけれど。

卑近な話ながら、これはこの不肖の訳者にとっても、力づけられると同時に、自戒すべき話ではあるのだ。専門家が専門バカに墮さず、その一方でアマチュアがそれを言い訳にせず、生産的な活動を行うには　そしてその逆に、専門家をそれだけで専門バカとして見下さず、一方でアマチュアがアマチュアであるというだけで否定せず、相互に意義ある活動を展開する道とは？　ジェイコブズという人間自身が、その一つの答を示唆しているように思うのだが。

だがこれはもちろん、あくまでこの訳者個人の評価ではある。日本の読者のみなさんが、本書から　そしてジェイコブズから　何を読み取るかは、むろんみなさん次第ではある。だがそこに必ずや有益な何かがあることを、ぼくは確信している。

## 5. 本書の邦訳について

さて冒頭に、これが本邦初の全訳だと書いた。本書には一応、故黒川紀章氏による既訳があった<sup>\*44</sup>。あったのだが、これは本書の前半二部だけを訳した部分訳でしかなかった。原著者に了解をとった、とのことではあるが、後半のかなり重要な分析と主張を考えたとき、これはにわかには信じがたい。

また、訳されていた部分も決してよい翻訳とはいえなかった。これについては、すでに随所で苦言が呈されている。ただしこれは前訳者の能力不足だけを責めるのは酷な面もある。というのも、ジェイコブズの英語はかなりやっかいだからだ。

やっかい、というのはむずかしいということではない。でも本書の書き方は、通常のノンフィクションや研究書の標準的なお作法とはちがう。実は本書は1961年の全米図書賞の座を、前出のルイス・マンフォード『歴史の都市 明日の都市』と争った。結局はマンフォードが受賞したのだが、『死と生』を推す声も強く、その推奨理由として何人かが挙げていたのが、その文体だ。「『死と生』は生き生きとしてゴシップ調だ(中略)ジェイコブズは読者に感情を通じて訴えかける」とある批評家は書いている<sup>\*45</sup>。感情的な訴えということは、ある意味で論理性が低いということだ。そしてゴシップ調はおしゃべり調ということだが、これはつまり、段落の途中はおろか同じ文の途中でも、思いついたことをどんどんぶちこんでしまうということだ。おかげで文は修飾節と関係代名詞でぶくぶくに肥大し、基本となる主語述語を拾うのも一苦労となる。以下に一例を示そう。

If such new streets are added economically, with a decent respect and restraint for saving the most valuable, the most handsome, or the most various among buildings that lie in their potential paths, and also with the aim of incorporation sides or rears of existing buildings into their frontages wherever possible, to

\*44 ジェコブス『アメリカ大都市の死と生』黒川紀章訳、鹿島出版会、1969.

\*45 O'Harrow, David, Alexiou, p 92 での引用.

give a mixture of age, then these new streets are seldom going to be straight for great length. (原著 p.381)

基本は If... then .... 構文だが、その間に詰め込まれているものが半端ではなく、economically と with a decent... と and also with the aim of... が並置となっていて、その中でさらに most で複数の節がぶら下がり、さらに最後のほうの to give a mixture of age は内容から考えてその直前のものではなく一つ飛んで with a decent.... の節にかかっているのに、その間に別のレベルのちがう節が割り込んでいて、という具合。

文法だけではない。ここで言われていることを一発で理解できる人はいない。この文章は、街区は短くなくてはならないから、既存の細長い街区にもっと道を入れよう、という話をしている。が、seldom going to be straight というから、ぐねぐね曲線を描いているのかなという印象がある。はて、どうしてか、としばらく考えてやっと意味がわかるのだ。要するに、最初は図 22.1 みたいな細長い街路がありますわな。これはたいへんよくない、というのが本書第 9 章の議論だった。

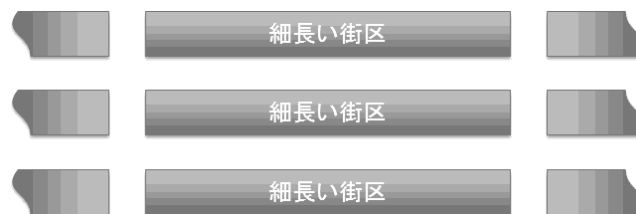


図 22.1 もとの細長い街区のある状態

そこに、新しく街路を入れれば、細長い街路が短くなってジェイコブズの言う多様性の条件ができる。ただ普通に街路を入れると、図 22.2 のようにまっすぐ複数の街区を貫通させようと思ってしまうのが素人の（というかジェイコブズ的には玄人の）浅はかさ。

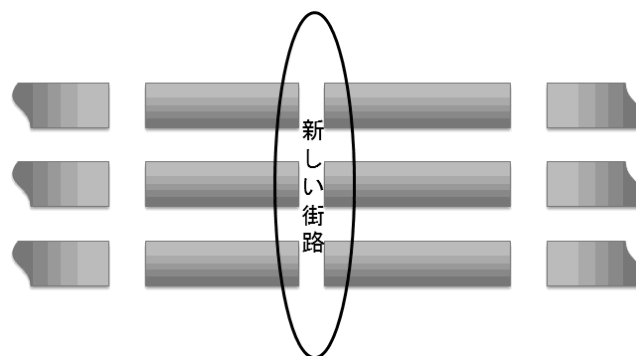


図 22.2 「まっすぐな」街路で細長い街区を短くしました

でもこういうやりかたはたしなないで、それぞれの街区を見て、こっちではこれを残す、あっちではあれを残すとか考えつつ入れると、図 22.3 のような具合になるといいたいわけだ。そしてこれこそ望ましい、と。

議論そのものの是非はおいておこう。でも、この楕円に囲まれたところは、どう見ても一本の街路とは呼べないから、街路がまっすぐでない、という表現はとってわかりにくいんだけど.....ジェイコブズは平気でそれをやる。彼女の頭の中では、この三つの街路は



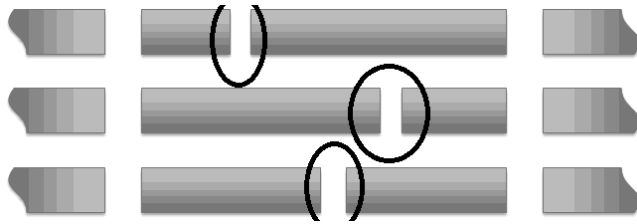


図 22.3 まっすぐでない新街路??

つながっている気分なわけだが、それを理解するのは一苦労。彼女の文を読んで明晰とかわかりやすいとか言っている人は、きちんと読んでいないことを告白しているようなものだ。

議論の中でも、各種の議論や概念のレベルはあまり整理されてはいない。用途の規制と形態の規制についての議論がごっちゃになり、個別の事例と一般論とが明確にわけられずに提示され、さらにそこへ正統派都市計画関係者への嫌味と罵倒が反語だらけでまぶされる。きちんと構造化された構成にはなっていない。スーッと流し読みしている分には、多少混乱しつつも普通に漠然と理解できるし、その議論の飛躍自体が楽しい面もある。だがそれを紙に書いて厳密に理解しようとする、えらく苦労させられるのだ。

また、すでに 50 年前の本ということもあり、当時の状況や各種のプロジェクトの所在地や計画などについて図版を入れないとわかりにくいな、と思っていたのだが、著作権保持団体から、原著にない図版類は一切入れてはならないというお達しが下ったため、これは実現できなかった。残念だ。いずれ可能であれば、サポートページで何らかのフォローが可能になればと考えてはいるところだ。

## 6. 謝辞その他

思えばそもそも本書の訳に手をつけたのは四半世紀前。大学時代の恩師、故山田学先生が、本書のまともな全訳がないと口癖のように文句を言うのを聞き飽きて、3 頁ほど自分で訳してみたのが発端だ。それをお見せしたら、「この調子できみが全部訳し直せ」と冗談で言われたのだが、まさか本当に全部やることになるとは予想もしていなかった。が、約束は果たしましたからね。

翻訳に大きなまちがいはないはずだが、細かいところではまだ見落としなどもあるかと思う。もしお気づきの点などあれば、ご一報いただきたい。明らかになったまちがいや、可能であれば各種追加情報なども、以下のサポートページで随時ご報告する。

<http://cruel.org/books/deathlife/>

本書の編集は、鹿島出版会の久保田昭子氏と渡辺奈美氏が担当された。面倒な原稿に辛抱強くつきあっていただき、ここに深く感謝する。ありがとう。またジェイコブズの経済関係著作の評価について意見をくれた稲葉振一郎氏にも感謝を。そして本書を手にとりてくださるみなさんにも感謝する。原著刊行から半世紀。この二一世紀の日本の読者が本書をどのように受け止めるのか、今から楽しみである。

2010 年 2-3 月 ピエンチャン / バンコク / 東京にて  
山形浩生

## 訳者解説 Version History

- v1.3 2010-4-6, データ集計まちがいによるNY等の人口減少時期、回復時期の年代誤りを訂正
- v1.2 2010-3-25, 「5. 翻訳について」に英語の例と曲がった街区の図を追加
- v1.1 2010-3-20, 参考文献等の脚注を追加
- v1.0 2010-3-11, 書籍版掲載バージョン